

泥中の蓮華

悪心おこる

「私はいくら聞いても駄目です。心にどうしても忘念忘想がおきてきてやみません。」

こうした言葉をたびたび聞かされます。つまり如何に求道聞法しても、悪心が内に起るが故に、信心が成就しない。自分は悪人だから救われたいと言うのであります。

これは無理もないことではありますが、しかしそう思う人は、まだ自覚が根本的でないのであります。自覚の何たるかを知っていないのであります。

心の幅員

初め誰でも本気になって、教えを聞き、道を求めて精進すれば、内にも外にも悪心など起らないようになるのだと思います。しかしそれは大変な間違いであります。

犬や猫等は、何等の文化的なものを持たぬのでありますが、彼等こそ、悪心も何も起きない。したがって善心もない、ただ単純な本能的な動きがあるばかりであります。彼等は精神生活に幅員がないのであります。時計の振子には、左右へ振幅がありますが、動物にはその幅員がないのであります。人間でも動物に近い人ほど、幅員がないのであります。

この心の幅員の狭い人が、よく誰からか聞いたことをそのまま、誠にしたりして、かつと怒り、大いに正義感、義侠心などをおこして、剣をぬいて斬つたりするのであります。そうした人はたいがい善良そうな人であり、常識の欠けた単純な人が多いのであります。恐るべきは、かかる種類の人であります。

一念三千

「一念三千」と言うのは、天台の観法に言うことで、一念の心に、三千の諸法を具足することを観ずるのであります。三千と言うのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人、声聞、縁覚、菩薩、仏の境界を十界と云うのでありますが、その各々の一法界に十界を具して、百界となり、一界に三十世間が説かれて、ついに三千世界となるわけでありませぬ。「介爾いやくもも心有れば即ち三千を具す。」で、一念の心に上は仏の世界から下は無間地獄のどん底まで、三千世界を具足していると言っているのであります。でありますから、心をただ一定の状態に固定しようとするところ無理であります。それよりも我が心の相は何であるか、そのありのまゝの相を深く知ることこそ、自覚体験の真実道であります。

でありますから、我等の心中には如何なるものも動いております。貪欲、瞋恚、愚痴の三毒はもちろん、鬼でも蛇でも、盗賊の心でも、詐欺師の心でも、およそ一切衆生の相は悉く八万四千の煩惱となって動いております。

如来の智慧が信心となつて、ほのかに照破して下さる時、それらのものは、その光の前に正体を曝露するのであります。

しかるにもし、内に何等の光あることなく、外へくくと外に引まわされておりますと、かゝる心内八万四千の煩惱は隠れて、その相を見せませぬ。相を見せぬ煩惱は、直ちにその人を支配する恐るべき力となつて、その人を黒暗へと引ずります。たとえば、過去には、随分よいことをした気で、自分にはあつぱれば、一大自覚の上に立つて人の為に立派な事をしたはずのことが、後になつて静かに考うれば、それは醜い自己の名利心の動きであつたことがわかり、辱しくて自分ながら咬んで棄てたいと思つても仕方がないことがあります。あるいは、如何にも自分は、学問があるとか、ものを知つておるとか吹聴しておいて、そつと自分に帰つた時には、自分ながらいまいましいことがあります。これらはすべてその時、自らの心中に光がなく、見えて来ない煩惱の為にやられていたのです。

時に高位高官や、社会の重要な位置にいる人が、我と自ら生命を絶つてしまふようなことがあるのは、初めはほんのわずかな名利の煩惱の相が見えて来なかつたが為に、それに乗つて動き出し、その名利心が順調に満足されて、大きな幹となり、枝と繁る間に、多くの悪事を成就して、ついに破綻が来たのであります。その一生は無意味なことでありませぬ。

悪人とは

人には、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根が開かれています。したがつて、六つの水路を持つた池のように、外から流れ込んで来る水次第では、善い心も悪い心も起きて来ます。自分だけがそれを離れて生きて行く事は出来ません。又自分の心中におき2た一切は、それが流れて人の心の池に入つて、心を動かします。かくして一切衆生は、同一の海水に住む魚の如く、生死海を出現しつつ、生きておるのであります。

「私は何と言う悪人でありませうか。私ほどの悪人が何処にありませう。」

と念仏しつつ泣き崩れている女の方をじつと凝視みつて思ひます。この方が娘時代であつた頃、花の咲いたような陽気な方でありました。それが嫁して人妻となるや、その家庭には、物のわからぬ姑があり、意地悪い義弟妹があり、夫は氣の荒い人であります。こうした中に一年二年と暮しておれば、どんな悲しい思いもせねばならず、どんな悪い心をも引き出されます。それをじつと忍んでおれば、いよいよ苦惱が内にもえて、自分でもどうすることも出来ないほどの悪い暗い心の持主になります。しかしそれは、世の如何なる人を、この中に入れても同一の状態になるのであります。今更、善人になれといった教えなど、もつて来たとして、どのようにもなりません。それならそのままどうすることも出来ないものでありませうか。

本願、現実の救い

私どもは、こゝに本願の救いを有難く尊く思はずにはいられません。

「無明長夜の燈炬なり 智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ。

願力無窮にましますば 罪業深重もおもからず

仏智無辺にましますば 散乱放逸もすてられず。」

人生の暴風駿雨に会って、如何ともすることの出来ない現実の中に救いを求める者にとつては、この二首の和讃が心からなる涙なくして受け取られるでありますか。

「無明煩惱しげくして 塵数のごとく遍満す

愛憎違順することは 高峯岳山にことならず。」

この一首、我の正体、人生の真相をじつと凝観^{みつ}めた、偽らざる相であります。塵数の如き無明煩惱、高峯岳山の如き愛憎違順、それ自体私の真相ではないか。しかるに念仏の救いはその真唯中に成就せられます。

「弥陀観音大勢至 大願のふねに乗じてぞ

生死のうみにうかみつゝ 有情をよばうてのせたもう。」

如来大悲は、誠に、誠に暴風雨吹き荒さぶ人生の現実の中にあつて、永久に撰取不捨して、金剛不壊の真心、弘誓大船上に救い上げて下さるのであります。

たとえ悪心はおこるとも

恐るべき煩惱の心に追いたてられて、それによつて動かされてゆくことは恐るべきであります。しかし、悪い心しか見えないからとて、その悪心を、我が力によつて滅しつくして、しかる後に初めてほんとうに生きるという人は、我及び人生の真相を知らぬ人で、大海の乾るのを待つのと同一であります。それではついに人生では何事も出来ないことであります。

しかるに念仏道は、たとえば生死大海の舟であり、あるいは又罪業深き泥沼に咲く白蓮華であります。されば、如何に我等の現実が逆悪に満ちたものであろうとも、それに囚えられることなく、念仏行の大善、大行を行すべきであります。

悪心はおこるとも大善を行ぜよ。心の波は打つとも念仏を行ぜよ。

朗らかな娘も、その周囲の様子一つでは、暗い顔の嫁になる。

「私は何という悪人でありましょう。私ほどの悪人がどこにありましょう。．．．しかし有難うございます。私故のお救いでございました。」と畳にひれ伏して念仏している女を拜む時、如何なる暴風駿雨にも亡びたまわぬ如来金剛の誓願力を、拜まらずにはいられません。

この女の人は、内に、止むべからざる、怒涛狂乱の動きを見ているのであります。う。それにかゝらず、その衷心には、求めずにはおれない心、念仏せずにおれない心、自分の心の底を見すえないではいらぬ光が訪れていることでもあります。機の善悪を超えて、善悪の機のただ中に如来本願の大行が生きて下さる時、いよく明らかなに、一切が見えはじめて来るのであります。

如来を信ずる心、名号を聞く心は、一番尊い崇いものに通う心であり、その光に照されて、現れ出る五逆謗法の我慢は、無間地獄を造る心であります。仏心に通うのみ、逆悪の相が見えて来ます。浄土を知るもののみ、地獄を知る。

かくして大善の廻向によつて、善悪淨穢のありのまゝを、深信し凝視しつつ、悪心は起ろうと、心の波は打上げようと、念仏の大行に生かさるべきであります。暗の深いことが光をともし邪魔ではなく、煩惱の深重なることが、念仏の華の咲きたもう邪魔にはならない。

何時までも、ゴム毯まりの一端をおさえて、ふくれ上るのを止めようとするような、大海の波を静めようと板塀いたへいをするような、愚な自力を棄て、直ちに如来常恒の大船に乗托すべきであります。光と暗とに眼を開かれて、ありのままの深さに徹することこそ、唯一の道であります。